

小鶴
Koduru



Kangaroo's march

イラスト・いがらしみきお





講談社文庫

常州大学図書館
蔵書のマ章

小鶴

講談社

|著者| 小鶴 1977年、福井県生まれ。脚本、演出、小説など多彩に活躍。脚本にテレビ「アザミ嬢のララバイ」(毎日放送、監督・犬童一心)、映画「純情」など。電子書籍の『36』はトップセールスを記録、『美人税』は本人の脚本・演出により舞台化。小説アンソロジー参加作品に『FKB饗宴～不思議で怖くて不気味な話』がある。

カンガルーのマーチ

こづる
小鶴

© Koduru 2012



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2012年6月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

ストーリーライン——岩淵規

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277270-9

目次

第一章

鈴子、身の上を吐露^{すすこ}る

7

第二章

コーチのお仕事

107

第三章

鈴子、女だけの家

145

第四章

夏の午後、独りじゃねえつぺ

173

第五章

決戦は七夕まつり

193

第六章

鈴子、レポる

215

	最終章	第十一章	第十章	第九章	第八章	第七章
	カンガルーのマーチ	解散しよう、そうしよう	菜緒 ^な の玉の緒、おふくろの袋 ^お	君を、アイス	鈴子、日和 ^{ヒヨ} る	そして祭りはやってきた
あとがき	428	421	359	323	315	291
						255



講談社文庫

カンガルーのマーチ

小鶴

講談社

イラスト・いがらしみきお

目次

第一章

鈴子、身の上を吐露^{すすこ}る

7

第二章

コーチのお仕事

107

第三章

鈴子、女だけの家

145

第四章

夏の午後、独りじゃねえつぺ

173

第五章

決戦は七夕まつり

193

第六章

鈴子、レポる

215

あとがき

428

最終章

カンガルーのマーチ

421

第十一章

解散しよう、そうしよう

359

第十章

菜緒^なの玉の緒、おふくろの袋^お

323

第九章

君を、アイス

315

第八章

鈴子、日和^{ヒヨ}る

291

第七章

そして祭りはやってきた

255

カンガルーのマーチ



登場人物紹介

川上 鈴子 がわがみ

中学三年生。菜緒の娘、愛子の孫。父の再婚を機に東京から加萌町に引っ越してきた。加萌町マーチングバンドへカンガルーのマーチン・マスコット・ガール。集中するとしなびた茄子なすみたいな顔になるのが特徴。

月船 菜緒

鈴子の母、愛子の娘。鈴子のことを小さい頃、へすずたんと呼んでいた。スナックで働いている。

月船 愛子 あいこ

鈴子の祖母、菜緒の母。昔、ミス加萌町に輝いた美人。夫に先立たれ仙台から故郷の加萌町に戻ってきた。

阪堂 まさる ばんどう (マーチン)

仙台で活動していたビジュアル系バンド「デュアル☆グレイ」のドラマー。中学二年の夏に両親を事故で亡くし、昇という風変わりな祖父に育てられた。加萌町への若者移住者でマーチングバンドを指導する。

萩野 規 はぎの たかし (ハギさん)

農家を営んでいる独身の男性。初恋の相手・愛子の手足となって世話を焼いている。元ビッグバンドのトランペット奏者。アロハシャツがお気に入り。

内藤 茂三 ないとう しげぞう

農協会長。ぎよろつとした目としゃんとした背筋が特徴。息子が副町長。バンドの指揮を担当。

川上 陸斗 りくと

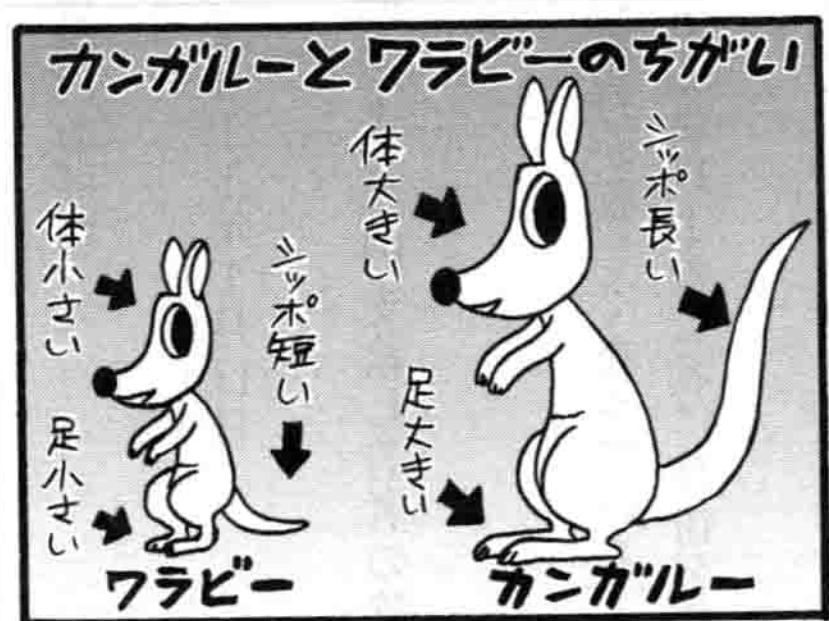
鈴子の父。ゲームソフト開発会社に勤務。鈴子が10歳の時に、菜緒と離婚。現在、歳の差再婚をし、一歳になる息子と東京で三人暮らし。

カンガルーの親子

340世帯1020人が暮らす宮城県加萌町、新山地区に出没すると噂になっている。ワラビーであるとの説もあり、真偽は謎に包まれている。

第一章

鈴子、身の上を吐露^{とろ}る



夕刊紙の地域欄をいい声であたしは読みあげた。

青葉日報社 地域ニュース 2011年1月11日

〈限界集落の存続をかけ、年間210万円支給し若者の移住を募集！ 加^{かも}萌^も町〉

高齢化が著しく進み、集落の維持が難しくなっている、いわゆる「限界集落」を守るため、加萌町が町外の35歳以下の若者に移住を募ったところ、78人の応募者があった。

加萌町では、65歳以上の高齢者が集落の半数以上を占める「限界集落」が点在し、集落の維持が大きな課題となっている。このため加萌町では、町外から移住する若者に一人年間210万円（現物支給による手当が10万円）を支給

し、住宅も無償で提供する新たな取り組みを始めた。

ちよつとしたアルバイトである。面白い記事をチョイスして読み上げるだけで一記事につき、二百円。世知辛い世の中にしては、実にいいバイトだ。

あたしの麗しい声に耳を傾けているのは萩野さんはぎのと愛子さんあいこだ。居間のこたつに足を突っ込み、三人でまったりしている。冬色の空の下、庭の南天が艶つややかに紅く実る。雪も舞い散る一月である。

愛子さんとは、あたしの祖母だ。萩野さんはあたしの察するところ、愛子さんの彼氏だ。あえてそこらへんの大人の事情には首を突っ込まないようにしている。そんなあたしは気のきく中学二年生で、こんな調子で冬休みを過ごしているのだからもちろん彼氏などいるわけもなく、名実ともに〈寒い〉女子だ。極寒ガールだ。

「大変なんだね、この町も」

「大変だからってこういうこととして何になるのかしら」

「暇つぶしの話題づくりかな？ カンガルーの親子が新山にいやまに出没するとかいう噂も、役場で流してるんじゃない？」

「信じてないの？ 鈴子さん」

「あたしは目に見えるものしか信じない主義なの。それよりさ、この支給される年間二百十万つていうのは、2と10で二とトウ。ニートウ〈ニート〉をそこはかとなく匂わせてたりして」

「そんな洒落たことするわけねえべつちや、あの町長があ」

「ふーん。つまんないの」

「鈴子^{すずこ}さんも応募すればよかつたのに」

何気なくつぶやく愛子さんは、あたしが凍りついたことなど知らない。まったく気にしていない。

「しばらくここに居座るんだから。そうすれば二百十万円頂けたのに、残念だわ」

厭味な言い方をしたなんてこれっぽっちも考えていない。〈天然キャラ〉と呼ばれる種族のど真ん中にいるうちの祖母は、背筋がシャンと伸びた美しい人だ。こんな風に、少々、毒つけのある発言をするのがたまにきずなんだけど……。

まあ、孫のあたしから見ても、マジで愛子さんは上品で美人だ。重要なのは、美人であるということよりも、上品に見えるということ。萩野さん情報によると、愛子さんは大昔、〈ミス加萌町〉に輝いたらしい。誰に似ているかといえば、通販せつけん（米ぬかとかそういうやつ）のCMに出ている『諦めないで』と爽やかにほほ笑むあ

の女優だ。あの人はきつと二十年後、愛子さんみたいな感じになるはずだ。間違いない。

あたしは気をとりなおして続きを読みあげた。

昨年の12月7日から移住の希望者5人を募集し、20日に締め切った。その結果、県内から61人、県外から17人の、合わせて78人の若者から応募があった。応募者の中には、休みを利用し町を訪れて応募書類を提出し、町の産業や集落を見学した若者もいたという。

加萌町の内藤副町長は、「履歴書を見ると、お墓ディレクター2級の資格を持った人や特技がバーベキューの人など才能豊かな若者たちが応募してきてくれた。いい人材を選んで町を元気づけてほしい」と話している。

加萌町では今月中にも書類選考・面接試験を行う予定。選ばれた移住者は2月から集落に移り住むことになる。加萌町の再生事業はいかなるものか？ 県では加萌町の新しい制度に期待を寄せている。

*なお、移住者は2年間、加萌町へ定住し、地域の祭りや地域再生事業へ必ず参加することが条件である。

「鈴子ちゃんは、応募してくる人とは違うっちゃねえ愛子さん。あんだの孫なんだがら、ここは愛子さんちでしょ」

「あら。そうね、鈴子さんはわたしの孫なものね……応募してくる方たちは他人さんだものね。ウフフ。ところで、鈴子さんていつからここにいるんだったかしら？」

愛子さんはときどき、記憶が曖昧になる。ストレス性の記憶なんチャラだということとは母からぎっくり聞いていた。でも、あたし自身のことを忘れられると正直、引いてしまう。心は、まさに潮干狩り。遠浅の砂浜だ。そりゃ、ここに来るまで愛子さんとはほとんど会ってなかったけどさ……。

「何怒^{なぬ}ってんの。口をとがらして。しなびだ茄子みでな顔すて」

「え？　とうがらし？　とうがらしのガス？　なすみでな？　は？　何？」

「んだがら、鈴子ちゃんのその茄子みでな顔は何だつて聞いてんだよ」

萩野さんはあたしに向かってゆっくり大きな声で同じ言葉を繰り返した。

いやいや、声の大きさとかそういう問題ではなくて。あたしは、萩野さんが何をしゃべっているのかがわからないのだ。苦笑いで乗り切ろうとしていると、愛子さんが通訳してくれた。